

仏様のおはなし新シリーズ第131集「七宝のもうもろの樹」

「仏説無量寿經」に七宝のもうもろの樹が説かれています。ある樹は、紫金(しこん)が本(もと)で、茎、枝、条(こうえだ)、葉、華、実が白銀(びやくぎん)などそれぞれの宝を具えています。さらに、白銀を本とする樹、珊瑚(るり)を本とする樹、水精(すいしよう)を本とする樹、瑠璃(るり)を本とする樹、瑪瑙(めのう)を本とする樹、碑礎(しゃご)を本とする樹、珊瑚(さんご)を本とす。そしてそれぞれの樹々の茎、枝、条、葉、華、実がそれぞれの宝を具えています。そしてそれぞれの樹々の宝樹は行行相值(ごうごうごう)する。そしてそれぞれの樹々の列と列があいあう」ということです。ここに「あう」という読みに「値」という字が用いられています。これには大切な意味があると受け止めます。「値」ということで私が連想する言葉として「値遇」という言葉があります。このことについて教えられたことです、「値遇」とは遇うに値するものに遇う、それは本当に遇うべきものに出遇うということだそうです。さらに言えば、誰に対しても遇うに値するものとして遇う、遇うべき相手として遇うということだと。

翻つて世の中における人と人との関係性またその出会いはといいますと、あるいは上下関係に支配されたり、あるいは多数派が少数派を押さえつけるということが罷り通る、そのようなことがあると思われます。それは、身近なところでは家庭、そしてさまざま人々の集まり、さらに国という単位の中でも、そして国と国の関係においてもそのような現実があるのでしょう。そのことに思いを向けるとき、私自身も上下関係を利用したり、多数派に属して他者を少数派と勝手に決めつけて押さえつけていることと無関係な存在ではないと自覚しなければなりません。もう一度、「仏説無量寿經」の「七宝のもうもろの樹」の譬えに願わわれていることを受けとめなおしたいと思います。

